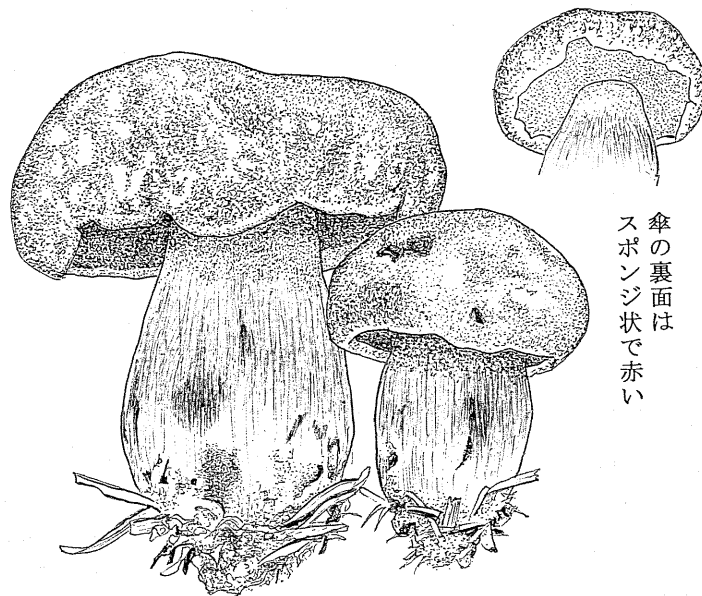


はり ま たん けん 播 磨 探 検

2020.7.13 297号
ええ 赤松 弘一



傘の裏面は
スポンジ状で赤い

アメリカウラベニイロガワリ（イグチ科）？

亜米利加裏紅変色 傘直径 45mm

学名 *Boletus subvelutipes*

の裏を覗くと髷は孔口というスポンジ状になっている。これはイグチの仲間の特徴である。イグチの仲間にはヌメリイグチやアマタケなど、みそ汁に入れると旨いものがあり、秋にはよく採集に行く。見つけたキノコは傘の裏の孔口の色が鮮やかな暗赤色だった。初めて見るキノコだったので「食えるか、調べてみるべし」ということで持ち帰った。

持ち帰ったキノコはその特徴から『アメリカウラベニイロガワリ』であると思われる。アメリカからの移入種ではないが、アメリカで同種が発見されて学名がついた後で、日本でも見つかったことからアメリカと名がついているらしい。イロガワリというのは、柄や傘を傷つけると瞬時に青く変色するためで、実際に傷つけてみたが、まるでマジックのように鮮やかに瞬時に変色した。よく似たキノコにオオウラベニイロガワリというのもあり、いずれも見かけはよろしくないが、非常に美味しらしい。

ところがネットには、よく似たイグチ科のキノコで『バライロウラベニイロガワリ』というのが載っている。傘の表面や柄の赤みが強いが、他の特徴はアメリカによく似ている。バライロは近年知られるようになった猛毒のイグチで、ほんの少量でも嘔吐下痢でのたうち回り、三途の川が見え隠れするらしい。亜高山帯の針葉樹林の林床に生じるというから、見土呂果樹園にはないと思う。しかし、もし食べて大当たりだったら、「あいつ、罰当たりよったで！」とか「やっぱり、アホですな…」と言われるに違いない（というか死ぬ）。

しかし旨いといわれるアメリカウラベニイロガワリなら食べてみたい！猛毒のバライロではないはずだ。だが、本当に命がけで食べる価値があるのか？食べなかったとしても世間は非難しないだろう。しかしこんな機会はもうないかもしれない。ここで撤退すべきか進むべきか、かの南極探検のスコット隊長は迷った挙句に進んで遭難したが、播磨探検隊長としては決断せねばならない。次号を乞うご期待！ 次号は無いかもしれない…

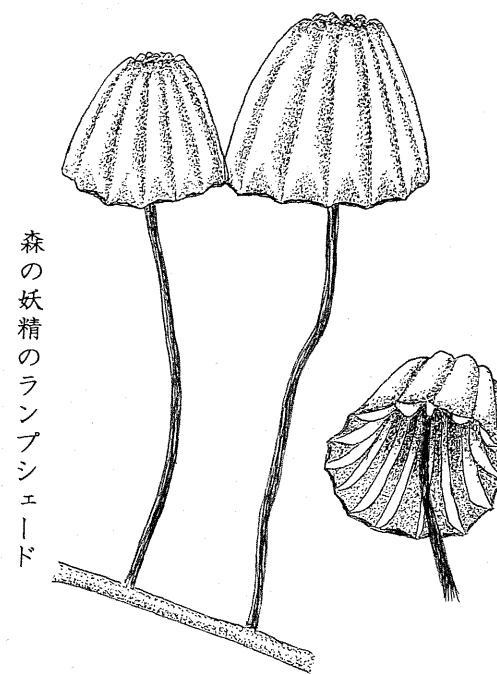
6月の最終土曜日、梅雨の晴れ間に加古川市立の見土呂果樹園に出かけた。家人は前に2度訪れているというが、私には全く記憶がない。これからの人生がやや不安になる。

スモモを買ったあと、木蔭のベンチで休んでいた。緑の芝生にクスノキやニレが木蔭を落とし、涼しげな葉擦れの音が聞こえる。近くの牛小屋からの濃厚な畜産の香りと相まって、北海道にいる気分である。

その芝生にたくさんのキノコが出ていた。シバフタケやテングタケの仲間に交じって、ぼってりとした太短いキノコが見つかった。傘は褐色で柄には黄色と薄紅が混ざっている。傘

雨の森 キノコ観察報告

Mushroom report in the rainy forest



森の妖精のランブシェード

ハリガネオチバタケ

針金落葉茸（ホウライタケ科）

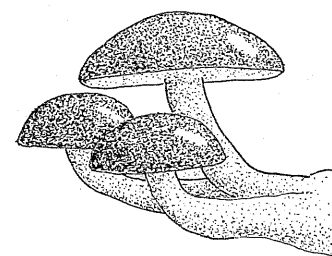
学名 *Marasmius siccus*

傘の直径 20mm 髷の数は 14 以下

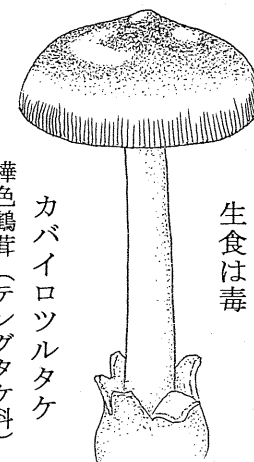
しく面白い形のものがある。自然の造形美には芸術家も遠く及ばない。私がキノコを探す理由は、食べるためだけではないのだ！ 一応、念のため言っときます。

他にはノボリリュウタケの仲間やシロソウメンタケなどが見つかった。帰りに道端の側溝から丸いキノコが3つ出ているのを見つけた。薄い藤色をしたイグチの仲間だが、何とも旨そうなので持ち帰り、茹でてから冷凍した。

6月末に採取したアメリカウラベニイロガワリらしきキノコも茹でて冷凍してある。すぐに食わないのは、今一度冷静に考えるためで、毒に当たる可能性に臆したのではない。探検家は生きて帰らなければならない。探検隊長には冷静さが必要なのだ。



実にうまそうな
イグチの仲間



棒色鶴茸（テングタケ科）

カバイロツルタケ

生食は毒